

魔女狩りとは何であったのか

前回(本年5月号)、現在も続いている刑法墮胎罪の問題性について言及した。その際に、無認可の中絶薬をインターネットで購入した女性への墮胎罪の適用例を挙げ、それはかつてのヨーロッパで行われた女性への弾圧を思わせると、述べた。念頭においてのは、言うまでもなく「魔女狩り」である。少なくとも6万人(何十万という説もある)が魔女として処刑され、その大半が女性だったといわれる(中には魔女とみなされた男性もいた)。魔女狩りが行われたのは、「迷信深い」暗黒の中世ではなく、むしろルネサンスや科学革命、宗教改革が起きた、近世(16世紀から18世紀頃)という時代の転換期である。ドイツの天文学者ケプラー(1571～1630)の母親(薬草の知識に長けていた)が、魔女の嫌疑で7年間も監禁されたことから窺えるように、科学の揺籃期であり、また古典文芸が復興し「人間」が表舞台に登場する近世に、むしろ女性へのジェノサイドは行われたのである。それは一体なぜだろうか。

小氷河・伝染病・戦争

中世の終焉を迎えるにつれて、自然環境に大きな変化が起こり、様々な疫病が猛威を奮うとともに、戦争がすべてを破壊しつくしていった。14世紀に始まる北半球の気温低下によって氷河が広がり、その後長きにわたりヨーロッパは厳しい冬に見舞われていく。以降19世紀まで続くこの小氷河期は、農作物に大打撃を与え、その結果、食糧が減少し飢饉が広がったといわれる。近年の研究では、この過酷な気象状況と魔女の迫害との間に関係があることが指摘されている。魔女が行うとされた「^{ひょう}雹の魔法」(収穫物を台無しにする)や「牛乳の魔法」(乳牛を病気にする)に、これらの原因が帰せられた。

長年にわたる凶作、さらには人々が密集する都市の不潔な環境は、病気の蔓延をもたらすこととなる。1347年のペスト(黒死病)では、人口の3分の1から2分の1が犠牲となったという。しかし女性の生存率は男性より高く、地域によっては女性の回復率は男性の約7倍であった。その結果、女性たちが魔法を用いて、自分が助かる代償に男性たちを死なせているのだと、多くの男性が信じ込んだとも言われる。1478年のペストもまた苛烈なもので、人口の3分の1を減らした。加えてペストの他にも、劇症の梅毒、ハンセン病、天然痘、はしかなどが人口減少に拍車をかけた。

ところが、ペスト流行の間も、戦火の勢いはほとんど衰えなかったという。フランスとイギリスの百年戦争が始まったのは、最初のペストと同時期の1346年である。さらにフランスは混乱状態にあったイタリアと交戦し、イギリスは、ばら戦争(内戦)の後、今度はスコットランドと戦い始める。17世紀には、三十年戦争のような、宗教改革と反宗教改革との対立を背景とした、長く悲惨な宗教的・政治的な国際紛争も起きた。気候変動や疫病を目の当たりにしても、なお支配者たちは戦争に明け暮れていたのである。

このような不安な社会・政治状況にあって、スケープゴートが設定されるのは歴史の常であり(例えばユダヤ人やロマなど)、たしかに魔女にもそのような性格が付与された側面はあろう。しかし主たる標的がなぜ女性となるのか。

ジーン・アクターバークによれば、従来の魔女狩り研究では、裁判、迫害、社会・政治状況という細部には焦点が当てられてき

たが、「魔女狩りとは女狩りである」という大問題は回避されてきた、とされる。20世紀後半になってようやく、フェミニストの歴史家、人類学者、作家たちがこの問題に取り組むようになった。その際、メアリー・デイリーは、魔女狩り研究のほとんどが「女性を処刑する側の視点」からなされたものであると指摘した。その後、フェミニズム運動によって、「魔女」は女性の反乱の象徴として受容されていく。「何十万人もの女性が殺戮され残酷きわまりない拷問にさらされたのは、女性たちが権力構造に挑んだからに他ならないとフェミニストたちはすぐに気づいた」からである。女性たちが挑んだ、この権力構造とは何であろうか。

資本主義と魔女狩り

シルヴィア・フェデリーチの『キャリバンと魔女』(2004年、邦訳2017年)は、女性、身体、本源的蓄積(マルクス)という3つの概念的枠組みによって、封建制から資本主義への移行を再検討した力作である。同書は、ドイツのエコフェミニスト、マリア・ミースの古典的名著『家父長制と世界規模での蓄積』(1986年、邦題『国際分業と女性』1997年)の系列に位置付けることができる。『キャリバンと魔女』における本源的蓄積の分析の中心に置かれるのが、16世紀と17世紀の魔女狩りである。魔女狩りはマルクスやフーコーの議論では決して言及されることはなかった。

フェデリーチが同書で取り組んだ最も重要な歴史的問いとは、何十万もの魔女の処刑をどのように説明できるのか、そして「資本主義」の出現が魔女狩りと同時期であったのはなぜか、ということに尽きる。フェミニスト研究者の間では「魔女狩りは女性によるみずからの再生産機能の管理を破壊することを目論み、より抑圧的な家父長的体制を^{おおむ}発展させるための地ならしをしたということについては、概ね意見が一致している」という。フェデリーチ自身も、「ヨーロッパの魔女狩りとは資本主義的諸関係の拡大に対する女性の抵抗への攻撃であり、女性のみずからのセクシュアリティの長所によって得てきた力、再生産能力の管理や治癒能力に対する攻撃であった」と結論づけている。フェデリーチは、この結論を導くにあたり、ある「仮説」を提示しているが、それについては次回に詳しく扱いたい。

翻って現在、我々もまたCOVID-19ならびに気候変動や頻発する大災害に脅かされている。しかし世界は連帯に向かわず対立や紛争に明け暮れ、核兵器や原発の廃棄は進まぬまま、貧困や格差、また女性への暴力は増す一方である。ブラジルやタンザニアにおいては、魔女狩りへの回帰も見受けられるとの報告もある。その中であってCOVID-19は、人が密集し、物や人の移動が著しいグローバル資本主義社会を、自己増殖に有利な条件として勢力を伸ばしつつあるようだ。魔女狩りは決して遠い過去の話ではない。それは、我々が今直面しているグローバル資本主義社会の構造を批判的に見抜く視座ともなるのではないだろうか。

[参考文献]

ジーン・アクターバーク『癒しの女性史』春秋社、1994年。
シルヴィア・フェデリーチ『キャリバンと魔女』以文社、2017年。
Mary Daly, *Gyn/Ecology: The Metaethics of Radical Feminism*, Boston, 1978.
『魔女の秘密展(公式図録)』中日新聞社、2015年。